

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	豊川市立金屋小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	たどろうぼくらのシルクロード 創ろう私の蚕ワールド

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 主題設定の理由

本学級は、少人数で個別の支援を要する4年生3名、6年生4名の男女が7名在籍する自閉症・情緒障害学級である。学習課題に対して教科書や資料集を使って調べることはできるが、さらに疑問を見つけ、学級の仲間とかかわり合いながらねばり強く学びに向き合おうとする力には弱さを感じる。これは、課題が教師から与えられるものであることと、課題解決の価値や楽しさを実感できていないことが大きく関係するのではないかと考えた。本校では、「わたしが好き！なかまが好き！金屋小が大好き♡～ねばり強く取り組み、ともに学ぶ喜びを味わおう子をめざして～」を主題に研究に取り組んでいる。私は、「ねばり強く取り組む」とは、自ら学習課題を追究し、解決しようとするということとらえている。

本実践では、東三河に残る養蚕業を取り上げた。これは、校区の70年前の地図から見つけた桑畑から東三河の蚕に出会い、一頭の蚕から養蚕業の歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承の取組などが学習できる教材である。教材として魅力あふれる蚕や、衰退の一途をたどる養蚕業に携わる人々を取り上げ、子どもの思いや考えを大切に課題を設定すれば、子どもたちは自ら学習課題を見つけ、解決し、さらにそのことを追究していくであろう。また、わかりやすい資料を選定し、効果的に提示することで、子どもたちは根拠をもとに自分なりの考えをもつことができると考えた。



2 研究の仮説と手立て

仮説Ⅰ 東三河の養蚕業やそれにかかわる人を取り上げたり、実体験や子どもの思いや考えを大切に課題を設定したりすれば、自ら学習課題を追究し、解決しようとするだろう。

仮説Ⅱ 学びの足跡をまとめ視覚化したり、教師の朱書きや対話により子どもの考えを支えたり、仲間や教師のはたらきかけにより子どもの思考をゆさぶったりすれば、自分の考えをもち、深めることができるだろう。

手立て

ア 東三河の蚕を育て続ける農家やそれにかかわる方をゲストティーチャーとして活用する。

イ 蚕の飼育体験や糸取り体験などの体験活動を取り入れる。

ウ 養蚕業に携わる人や教材とのかかわりから生まれた子どもたちの思いや疑問から課題を設定する。

3 研究の実際

(1) 校区の今と昔について調べてみよう

単元の導入では、地域の養蚕業に出会わせるために、70年前の校区の土地利用図から桑畑に着目させた。校区の今と昔の土地利用図を比較する中で、70年前には桑畑が多くあることに子どもたちはすぐに気づいた。「桑の葉は蚕という幼虫が食べるエサだってYouTubeで見たことがある」という発言から、「本物の蚕を見てみたい」「今も育てている人がいるのかな」と子どもたちは蚕に興味をもち始めた。休み時間に蚕がどんな生き物なのかタブレットで調べ、学級の友達に伝える姿が見られた。

そこで、新城市出沢で養蚕をしている近藤幸子さんを訪れることにした。蚕が糸を吐いて繭になったり、繭を手作業できれいにしたりする様子を、子どもたちは食い入るように見ていた。蚕の吐く糸から絹糸や布ができることを着物や布を見せながら、近藤さんからお話いただいた。



資料1：養蚕農家の見学

(2) 子どもたちの疑問から課題設定

「なんで蚕は桑の葉を食べるのか」「蚕がどのように糸を出しているのか」という疑問だけでなく、成長過程を知りたいという思いを子どもたちがもっていることがわかった。また、蚕の吐く糸からどうやって絹糸や布ができていくのか、絹糸がどんなことに使われているのか疑問にもつ子たちもいることも把握することができた。そこで、「どうやって育てているのか」「どうやって糸や布にしているか」という2つの学習課題を設定した。この日の振り返りに、「蚕が出した糸で着物をつくるのがすごいと思った。本当に桑の葉だけ食べるのか、蚕はどのように糸を出しているのか見たい。」と書いてあることから、蚕の飼育、蚕から絹への過程に関心を持ち、自分たちの学習課題解決への第一歩を踏み出せたと考える。



資料2：蚕を見つめる児童

(3) 蚕を育てるぞ！育てた蚕から糸を取ってみよう！

子どもたちの関心が蚕から糸に向かったため、近藤さんや金屋中学校で中学生に糸織りを教えたことがある小島さんを招いて糸織り体験をすることにした。糸織り機を教室に設置し自分たちが育てた繭を鍋で1時間ほど煮て、道具を使って糸の先を探し、いくつかの繭の糸を手織り寄せてできた一本の糸を巻き取る作業を体験した。繭からきれいな絹糸を紡いだ子どもたちは感動している様子だった。児童Aは、細い糸を何度も探しながら糸織り機に巻き取らせていた。体験後の児童Aの振り返りに、「こんなきれいに糸になってすごい。近藤さんたちの繭はこの後どうするのか知りたい。」と書いた。繭から糸や布になる過程という学習課題を自ら追究し、解決しようとする姿が見て取れる。

(4) 近藤さんたちの蚕はどこへ行って糸や布になるのかな

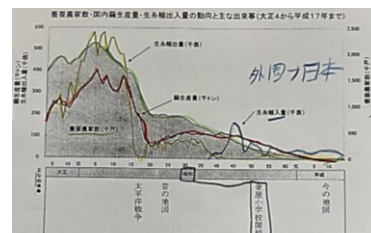
近藤さんたちの繭がどこへ行って糸や布になるのか、疑問をもった子どもたちに、田原市の神宮神御衣御料所に買い取られることを伝えた。聞き慣れない言葉に驚きを感じ、黒板に書かれた文字をメモしたり呪文のように何度も声に出したりする子どもたちの姿が見られた。奈良時代から最高級の絹糸「赤引の糸」として伊勢神宮に奉納され、神に仕える人の衣装になること、伊良湖から船を使って伊勢に運ばれる伝統行事「お糸舟」を継続している人がいること、そして、東三河の養蚕農家がやめてしまい、近藤さんたちが頼まれて生産に携わっていることをうかがった。児童Aの振り返りには「伊勢神宮にもわたす」「育てる人がへったのかな」とあり、近藤さんの蚕と伊勢奉納の伝統文化が化が繋がっていることに驚きを感じていることがわかる。



資料3：糸取りをする児童

(5) どうしてみんなは養蚕をやめてしまったのかな？

伝統産業が近藤さんはじめわずかな方たちにしか伝承されていないのはなぜか、子どもたちが東三河の養蚕業の衰退に関心に向けたところで、養蚕農家数と国内繭生産量の動向と主な出来事の紙資料を提示した。視覚的に変化を読み取りやすくするために、色鉛筆を使って各項目の推移を確認させた。色鉛筆を操作しながら、「はじめは増えているけど、急に減ったなあ」「外国産の繭が出てきたぞ」などつぶやく姿が見られた。



資料4：養蚕業の衰退グラフ

児童Aのワークシートを見ると「大正は農家が多かったけど、昭和からだんだん減ってきている。戦争が終わった後に、生糸の輸入が始まった。」と書かれていた。変化を正確に読み取り、自分の考えをもつことができたと考える。さらに、紙資料だけでは読み取ることができない歴史的背景や現在に至る過程について、近藤さんに子どもたちの疑問に答えていただいた。

(6) みんながやめてしまうのに、どうして蚕を育て続けるのかな

多くの農家が養蚕の仕事を辞めていく中で、どうして近藤さんたちは続けていくのかと子どもたちは思い至った。これこそが本単元で子どもたちに考えさせたいことである。近藤さんから養蚕業を続ける思いを子どもたちに伝えてもらったところ、子どもたちのつぶやきから「すごいと思った」という言葉がでてきた。何にすごさを感じているのかを把握し、蚕を飼う大変さだけではなく養蚕業を継続する思いに迫らせたいと考え、「近藤さんのいちばんすごいと思ったことは」という問いを設定し、考えをもたせることにした。「伝統のために今も蚕を育てているのがすごい」「誰かがやらなきゃと思って、自分がやっている」「使命感だけで自分ではできないと思う」など近藤さんの生き方に共感する発言を得た。

4 まとめ

今回の実践では、蚕の飼育体験や聞き取り、糸取り体験を通して生まれる子どもたちの問いや思いを大切にしながら単元を進めることで、初めて蚕に出会った5月から子どもたちが自ら学習課題を追究し、解決しようとする姿が見られた。問題解決することの価値や楽しさを実感することができたと思う。また、養蚕業にかかわる人々の姿勢、仕事、生き方に迫る中で、自分の考えを深める子どもたちの姿を見ることができた。魅力ある人や教材とのかかわりを通して、さらに子どもたちに力をつけさせていきたい。